

現

代



六甲アイランド沖から区域をのぞむ

水害の被害に加えて空襲の大きな痛手を負ったこの地域、五か町村は、戦後の歴史を町の復興で始めたといえる。このころ、神戸市との合併問題が表面化し、激しい論争が展開された。戦後復興を考え新市域を視察した御影町や、詳細な復興計画を立てた魚崎町の意見は合併に傾き、従来富裕で独立心の強かった住吉村もこの時期、合併を考え始めていた。しかし、合併によつてこの地域の主体性がうすれることを嫌った住民の中に、五か町村の合同による新市・甲南市あるいは灘市の構想も具体化し、一時はこれに東の芦屋市も加わる気配をみせて、情勢は複雑となった。このような動きの中で結局昭和二十五年（一九五〇）四月に御影・住吉・魚崎の三か町村は神戸市と合併した。その結果できた区の名称については、灘の中央部にあるところから、灘区とし従来の灘区は西灘区と改めよとする意見や、本灘区にせよという意見も出されたが、最終的には灘区の東ということから東灘区と決定された。この年の秋、残った本庄・本山の二か村は、芦屋市からの合併勧誘によつて住民投票や反対派村会議員のりコール運動など、激動のすえに十月十日、神戸市との合併にこぎつけた。

こうして発足した東灘区は、御影町役場に区役所を置き、他の四か町村役場にそれぞれ出張所を設けてその公務を開始し、翌二十六年（一九五二）四月に最初の選挙が行われて六名の議員を市会に送り出した。区役所はやがて区の中央に位置する住吉に移り、同四十三年（一九六八）十一月に旧総合庁舎が完成した。この間、復興事業はめざましく進み市民生活も便利になった。昭和二十五年（一九五〇）八月、最初の市バスが阪神御影駅と甲南病院や神大付属小学校を結び、同二十七年（一九五二）には白鶴美術館、国鉄（現JR）本山駅、森市場へも新路線が付き、区交通の中心となった御影駅に阪神特急が停車しはじめたのが、同二十九年（一九五四）九月のことであった。また、御影電話局管内の電話は同二十八年（一九五三）に神戸市内扱いになっている。

合併もない昭和二十六年（一九五二）夏に御影校舎に入った神戸大学理学部は、同二十九年（一九五四）春から文学部と理学部に分れ、同二十七年（一九五二）には神戸商船大学も開学して教育面での大きな影響を与えるようになった。

こうして復興著しい東灘区は昭和三十年代には新た

な発展を始める。当時は山と海に包まれ豊かな自然環境の中で阪神間の住宅地として人口は増加した。昭和三十一年（一九五六）には六甲山系が瀬戸内海国立公園に編入されている。同三十七年（一九六二）には灘神戸生協が成立して住民の日常生活に便宜を与えることにもなった。

しかし、昭和三十八年（一九六三）十月の国道四十三号線の完成の頃から、四十年代の高度成長経済の動きが急速となり、都市化の波はますます高まって六甲の山肌には宅地が開かれ、その土砂は灘の浦波をさえぎって埋め立て地を拡げていった。同四十六年（一九七二）には渦森台ゆき市バス路線が開通した。こうして物質的に豊かになった反面、高度成長のひずみも出はじめ、同四十八年（一九七三）六月に、区内で初めて県立御影高校や市立御影工業高校では光化学スモッグの被害がでている。

地域文化の振興のための施設も整備され、昭和四十九年（一九七四）には東灘図書館、同五十年（一九七五）には東灘体育館、平成四年（一九九二）には東灘区の文化の核となる施設として東灘区民セン

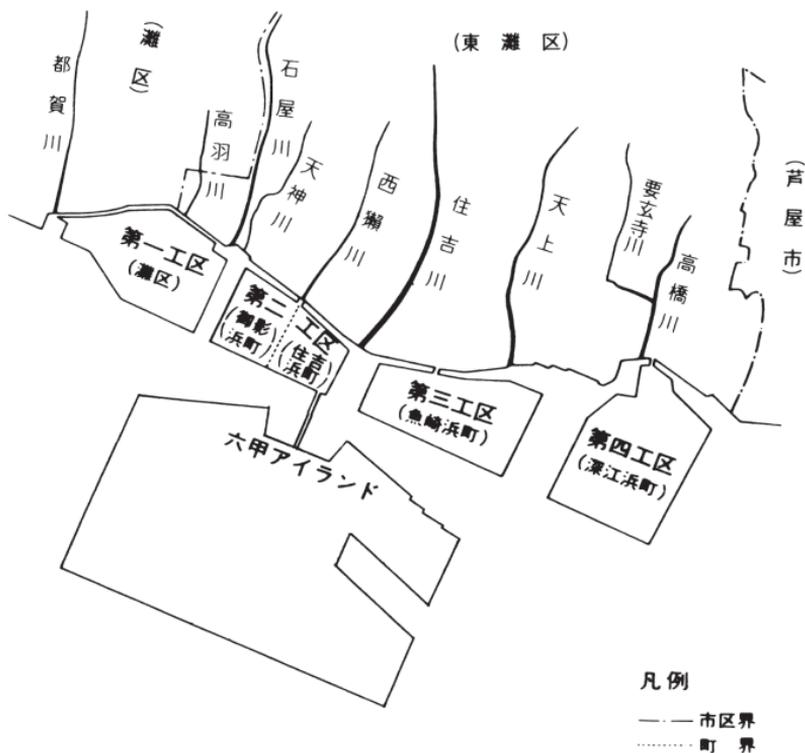
ターが完成した。また、地域福祉センターが各小学校区に整備され、ふれあいのまちづくり協議会により運営されている。

平成五年（一九九三）には東灘区沖に人工島六甲アイランドの埋め立てが完了し、現在では約二万人が居住している。

平成七年（一九九五）の阪神大震災では、東灘区の家屋の約半数が全半壊となり、千五百名近くの方が亡くなった。古い酒蔵など由緒ある町並みや多くの施設が破壊され、貴重な文化財も失われた。

平成十二年（二〇〇〇）二月に、国道二号線をはさんだ旧庁舎の北側に今の総合庁舎が完成した。

平成二十二年（二〇一〇）には東灘区は区制六十年を迎え、同二十五年（二〇一五）九月には旧庁舎跡地に東灘図書館が移転。令和二年（二〇二〇）に区制七十周年を迎えた。今後も住環境や地域防災体制の整備、産業の復興を課題として、緑豊かな魅力あるまちづくりを進めていきたい。



戦災の状況

町 村 名	死 者	負傷者	被害家屋	被災者	被災率 (戸数)
	人	人	戸	人	%
御 影	442	416	4,220	15,740	74
住 吉	59	511	2,695	13,286	71
魚 崎	108	236	1,325	5,740	39
本 山	143	194	2,505	6,714	52
本 庄	436	225	2,396	15,656	72
計	1,188	1,582	13,141	57,136	62

(『兵庫県復興誌』より)

神戸地方の地震から

六甲山を形成した衝上断層の中で、渦が森断層や五助橋断層の断層面が東灘区内で露出していることは知られていた（35ページ参照）。神戸市内では、新幹線新神戸駅のすぐ北の山の急斜面や諏訪山のバス道のすぐ北の急斜面も断層の崖である。そして、このように幾筋も走る市内の断層線に沿って、夢野や湊山や諏訪山や布引で鉱泉が湧き、さらに宝塚や有馬の温泉が利用されている。

日本列島の東西から大地に加えられる力が長い年月の間にエネルギーを蓄積して、このような断層がずれ、地震が起こる。このようにして起こり、近畿地方を襲った大地震の記述が、古文化や古典記録の中にある。鴨長明の『方丈記』は、元暦二年（一一八五）に京都を襲った地震を記録している。「おびただしく大地震ふる」と侍りき。・山はくずれて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、巖割れて谷にまろび入る。（建物は一つとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰たちのほりて盛りなる煙の如し。地

の動き、家のやぶる音、雷にことならず。家の内にをれば忽にひしげなんとす。走り出ずれば、地割れ裂く」と平成七年（一九九五）一月十七日の兵庫県南部地震の時の我々の体験・仁川の崩土や長田の大火、北淡の地割れなどーのような描写がある。同書には、その時は余震も「驚くほどの地震、一、三十度ふらぬ日はなし。十日・二十日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四、五度、一、三度、若は一日ませ（一日おき）、一、三日に一度など、おほかたその余波、三月ばかりや侍りけむ」と長明は記している。この地震について、『平家物語』では「七月九日の午の刻ばかり：九重の塔も上六重振り落とす・皇居をはじめて人々の家々すべて在々所々の神社仏閣あやしの民屋、さながらやぶれくずる」と、やや詳しく描写したあと、滅亡した平家の人々の怨霊にかかわるものだと書いている。この元暦二年（一一八五）には二月に屋島の戦い、三月に壇ノ浦の戦いがあった、その四か月後にこの地震が起こったわけである。『平家物語』には「遠国近国もかくのごとし」とあるから、かなり広い範囲で被害が出、首都圏・畿内に属する神戸地方も相当に被災

したであろう。

その後の大地震に関して、神戸には須磨寺に伝わる古記録『当山歴代』が、豊臣秀吉の晩年、文禄五年（一五九六）閏七月十二日の夜半に起こった大地震を詳しく記録している。この地震で須磨寺では本堂・三重の塔・権現社などの諸堂が倒壊し、参籠中の老僧や約百五十人の巡礼が生き埋めとなった。全員が体に障害を負い、巡礼の内の二人は体が砕けてしまったと書かれている。須磨浦公園の敦盛塚は倒れて浜まで転がり、兵庫の街は全壊したうえ火災が発生して、死者の数も知れないと『当山歴代』は記している。『有馬縁起』という古文書では、この地震で有馬では秀吉の御殿など多くの建物が崩壊し、いくつかの泉源では湯が高涌したと書いている。この文禄五年（一五九六）は『方丈記』や『平家物語』の元暦の地震から約四百年後である。それ以上にも神戸地方を襲った地震は多いが、歴史の中でこれらは特に大きく描写されている。一五九六年からまた四百年後を考えると、もちろん短絡的に断言はできないにしても、この近辺で大きな地震の起こる危険性は歴史的にもあったわけである。歴

史に接しながら特に注意を払わなかった私も含めて、これからはさまざまな学問や体験の発する警鐘に謙虚に耳を傾けなければならぬと思う。



自動車もろとも倒壊した阪神高速道路神戸線

御影町

大正十三年（一九二四）十二月に落成した近世ドイツ風の鉄筋コンクリート二階建の堂々とした建物であった。神戸市合併後は昭和三十年（一九五五）十月まで、区役所本所と区役所御影出張所となる。その後は、東灘区建設事務所、昭和四十七年（一九七二）四月からは兵庫県予防医学協会が使用、昭和五十三年（一九七八）に解体されて六十年近い歴史をとじた。

町章は、明治四十三年（一九一〇）に御影の「御」の字を扇形に図案化したものがあつたが、昭和四年（一九二九）一月に改定。これは古歌によく歌われた「御影の松」にちなんで、三本の松葉を組み合わせたものである。御影町内のマンホールの鉄蓋などに、まだいくつが残っている。



元御影町役場

住吉村

旧住吉村役場は空襲で焼失した。そこで戦後は住吉幼稚園舎が村役場となっていた。合併後は今の東灘図書館の位置に、木造モルタルぬりのこの区役所出張所が建てられていた。

村章は、全国から公募され、ひらがなの「す」をもとにしたものが、昭和十二年（一九三七）一月に制定された。



村章



元住吉出張所

魚崎町

町役場は、昭和十二年（一九三七）十月に落成した鉄筋コンクリート三階建の建物で、合併後、区役所の魚崎出張所が置かれた。昭和三十二年（一九五七）から東灘市民病院、昭和四十七年（一九七二）からは市民病院の東灘診療所となった。昭和五十一年（一九七六）に全面的に修復され、東灘文化センター（平成四年七月閉館）として市民に親しまれ、現在もしょうやかな姿をのこしている。

町章は、五百崎の「五百」を図案化。大正十年（一九二一）三月に制定されたものである。



町章



元魚崎町役場

本庄村

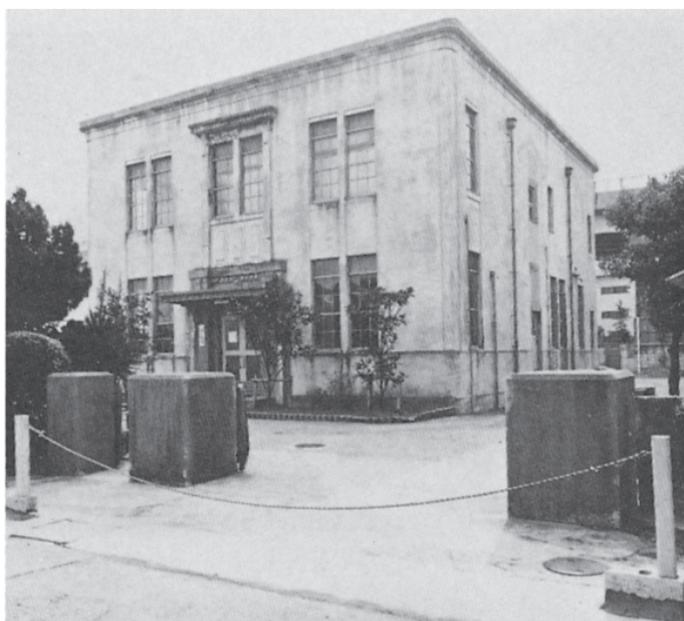
昭和四年(一九二九)八月に完成した鉄筋コンクリート二階建のどっしりしたこの建物には、合併後は区役所の本庄出張所が置かれ、昭和三十三年(一九五六)二月からは本庄公民館として利用されていた。村章は、漢字の「本庄」を図案化したものだが、いつ制定されたかわからない。



村章



旧本庄村役場の碑



元本庄村役場

本山村

現在の本山保育所・本山地域福祉センターの地に村役場があった。建物は昭和二年（一九二七）に完成し、合併後は区役所の本山出張所が置かれた。昭和三十年（一九五五）からは東灘建設事務所、のち土木事務所が入った。

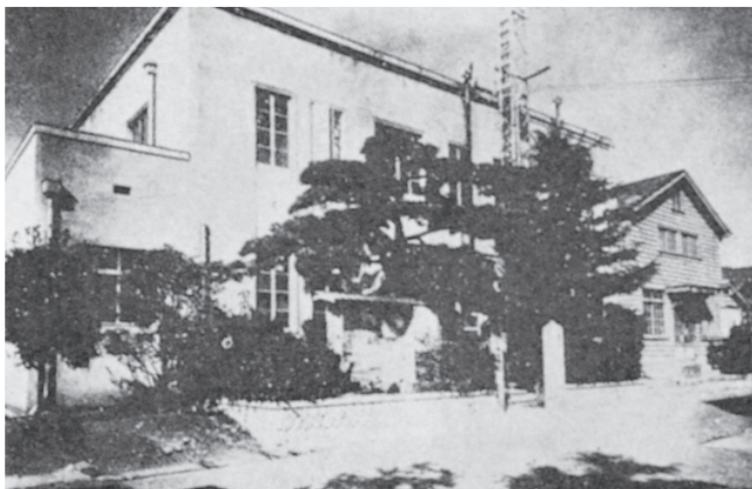
村章は、漢字「本山」を図案化したものだが、いつ制定されたかはわからない。



村章



旧本山村役場の碑



元本山村役場

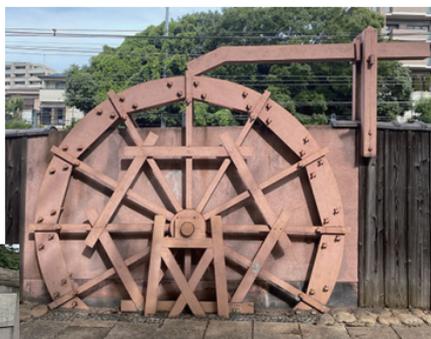
六甲ライナーに沿って

平成四年（一九九二）に完成した世界最大の人工島・六甲アイランドの面積はおよそ五千八百平方km。JR住吉駅から阪神魚崎駅をへて、マリンパーク駅まで全長四・五kmの六甲ライナーは、この未来都市への足である。先輩にあたるポートルライナーの経験を生かして、ハイテクを駆使したモダンな乗物だが、建設に当たって、周辺の景観問題や阪急電車との連絡などの問題もこのこった。

全線が高架で、その下に公園整備が行われた住吉駅と住吉川の間には、「ハニワの広場」と「水車の広場」がある。ハニワの広場では近在の考古学的遺跡の解説板や住吉宮町遺跡出土の埴輪の複製があり、また、水車の広場では大正時代まで住吉川流域で盛んだった水車業の解説や水車小屋や石臼の展示がある。

住吉川沿いには架線の下に緑地や水辺におりる階段が整備されており、国道二号線と魚崎駅との間には、谷崎潤一郎の旧邸「倚松庵」が公開されており、さらに南には、かつて魚崎一帯に広がっていた「雀の松原」

にちなむ小公園がある。



水車の広場



ハニワの広場

香雪美術館

御影郡家二丁目十二一
阪急御影駅

阪急御影駅から少し東。朝日新聞を創刊した村山龍平氏収集の、絵画・書跡・仏教美術・茶道具・武器など幅広いジャンルの美術品を収蔵し、十九点の重要文化財が含まれている。昭和四十八年（一九七三）十一月に開館。氏の香雪の号にちなんで名づけられた。

香雪美術館

美術館に隣接



する旧村山家住宅は、明治四十二年（一九〇九）築の洋館を含む建物六棟が、明治・大正期の邸宅の面影を今に伝えるとして、平成二十三年（二〇一一）に国重要文化財に指定された。（160ページ一覧表参照）



レパント戦闘図・世界地図屏風 江戸時代（重要文化財）
（香雪美術館提供）

桜守公園（岡本南公園）

岡本五丁目五
阪急岡本駅

桜の研究と保護に生涯をささげた笹部新太郎は、特に昭和三十四年（一九五九）に御母衣ダムによって水没することになった樹齢四百年の老桜を移植したことで知られ、水上勉の小説『桜守』のモデルになった。氏が昭和三十五年（一九六〇）から住んだ邸の跡に、六種十四株の桜を中心として神戸市が公園を開設したのは、昭和五十六年（一九八一）である。

その園内の通称「新太郎桜」は、昭和六十年（一九八五）にカスミザクラの新しい園芸品種であることがわかり、ササベザクラと命名された。ササベザクラは、昭和六十二年（一九八七）に県の天然記念物に指定されたが、枯死のため平成十一年（一九九九）に指定解除された。その後、各地のササベザクラが移植され、桜守公園の春を彩っている。



桜守公園

コープこうべ生活文化センター

田中町五丁目三

JR住吉駅から東へ歩いて約八分。国道の北に生活文化センターがある。

世界有数の生活協同組合、コープこうべが創立六十年を記念して建てたもので、この生活文化センターには図書室、体育館、ホール、貸室、文化教室、保育室などがあり、また、センター内には現代画家の力作や、江戸から昭和時代にかけての生活用具・錦絵・全国屈指の双六コレクションがある。

建物は、昭和六十年（一九八五）一月に神戸市建築文化賞をうけ、隣接する生活文化センター西館（旧兵庫県立健康センター）との間の広場には、神戸出身の柳原義達氏による裸婦の像をはじめ、数多くの作品が飾られている。



コープこうべ生活文化センター

小磯記念美術館

向洋町中五丁目七
六甲ライナーアイランド北口・小磯記念美術館前駅

小磯記念美術館は六甲アイランドの緑あふれる公園の中にあり、約三千百点の収蔵品を持つ。三つの展示

室では、油彩・素描・版画・挿絵原画などの作品が、年代やテーマによって展示されており、中庭には小磯画伯のアトリエが移築され、愛用のイーゼルやパレットなどで創作の場が再現されている。

また、ハイビジョンギャラリーでは百十インチの画面と鮮明な画像で、小磯画伯の作品や画業などを解説している。図書コーナーもあって、小磯芸術の全容を学ぶことができる。（160ページ一覽表参照）



小磯記念美術館

神戸ファッション美術館

向洋町中二丁目九
六甲ライナーアイランドセンター駅

神戸ファッション美術館は、ファッションをテーマにした公立では日本初の美術館。ミュージアム、リソースセンター、イベントスポットという3部門を有するファッション美術館は、ファッションを体感できることができる新しいタイプの美術館である。

1階展示室では貴重な収蔵品を活用し、「衣」を様々な切り口で紹介する「ベシック展示」とテーマを決めて展示する「特別展示」を常設展示として開催。

3階リソースセンターのライブラリーではファッションに関わる書籍、雑誌等の資料を数多く揃えている。4階・5階では、セミナー室やオルビスホールを有しており、各種会合やイベントスポットとして幅広い利用が可能。(160ページ一覽表参照)



神戸ファッション美術館

世良美術館

世良美術館御影二丁目五
阪急御影駅

小磯良平画伯に師事した世良^{よみえ}臣絵が平成四年（一九九二）に創設した個人美術館。「女性がほっとできる空間」をコンセプトに季節によって水彩、油絵、パステル、ガラス絵作品を展示している。また地域の文化交流拠点として、サロンコンサートやギャラリースペースも利用されている。神戸市建築文化賞、兵庫県さわやか街づくり賞など多数受賞した建物は、閑静な住宅街にあり、周囲にじっくり溶け込んでいる。（160ページ一覽表参照）



世良美術館

神戸ゆかりの美術館

向洋町中二丁目九
六甲ライナーアイランドセンター駅

世界に開かれた港町・神戸。海や、山を背景にかつて多くの洋風建築が存在したエキゾティックなこの町は、「国際的」「ハイカラ」「モダン」「明るく開放的」といったさまざまな「神戸らしい文化」を生み出してきた。

そんな神戸の芸術文化に触れてもらおうと、神戸市が平成十九年（二〇〇七）三月二十三日、六甲アイランド（神戸ファッション美術館内）に開館した。神戸の芸術文化の発展を担い、日本の芸術界にも大きな足跡を残した芸術家達や、現在も神戸で活躍中の芸術家達約五十人の絵画、彫刻約千点を所蔵展示している。（160ページ一覽表参照）



神戸ゆかりの美術館

住吉だんじり資料館

住吉東町二丁目三
東灘図書館隣

江戸時代から親しまれてきただんじり文化とその魅力を紹介するミュージアム。住吉・西區の先代だんじりを実物展示しており、立体刺繍幕や装飾彫刻なども近くでじっくりと見学できる。住吉各地区のミニチュアだんじり模型や法被などの展示コーナー、迫力あるだんじりシアターの映像、パネルによる解説など見どころ豊富である。(160ページ一覽表参照)

